

Hakuai Story

博愛物語

わかれ わかれ かいこう かいこう
永訣との邂逅 (X)



遅咲きの庭の八重桜が、往く春を追いかけて、薄紅色の蕾を開花させた。

父親は心^{やぶ}破れ、再び、自宅での療養を余儀なくされた。僅^{わず}か、ひと月余りの職場への復帰だった。



父親は、以前に増して無口になった。瘦^{ちちおや}身の背中には、意のまま^{まま}儘にならない闘病への苛^{いら}立ちが滲んでいた。

「焦^{あせ}って、無茶をしたからよ」。

母親は、父親の性急さが原因とばかりに咎^{とが}めながらも、再び、渾身の看病を開始するのだった。父親の食性は、微^{わず}かに改善

したものの、この頃から咳^{せき}に混じって粘性の痰^{たん}が出始めた。

普段の会話にも言葉が途切れ、喘^{ぜんめい}鳴を伴っての不調律な呼吸を強^しいられた始めた。絡まった痰が切れないのであろう。昼夜

を問わず、「ぜいぜい、ヒュウヒュウ」と喘^{ぜんめい}鳴は続き、その度に、往診の依頼をせざるを得なかった。

満開の盛り花を揺らしていた八重桜が散った。

惜春の情を葉色に封じ、^{はむら}葉群の影を部屋に落としている。

父親の寝ていた座敷から眺める八重桜の移ろう姿こそが、変貌してゆく父親の^{すがた}病状に重ね合わせの^{もの}変化だった。

胸騒ぎは的中し、^{かけ}鬩りは、肺の深部まで浸潤し続けていた。

父親の衰弱は、^{ひごと}日毎、加速して、座って居ることすら困難を極めた。この頃は、肺に^た溜まった胸水を注射器で抜いて貰う^{こと}処置が日課だった。

^{まつやに}松脂色の胸水が、特大の注射器に2本分ほど収まると、それまでの喘鳴が嘘のように取れて、^{まど}円かな夢路に旅立つかのような寝息を立てるのだった。

「胃の手術に起因した体力の消耗と免疫力の低下が原因で、肺の感染症に^{りかん}罹患している」。この頃の^{といかけ}疑念にも^{もっと}尤もらしい^{うそ}空言を重ねていた。真実の病名、「手遅れの癌」を、まだ、しっかりと守り抜いていた。

雨脚が絶えない。

鬱気な梅雨の季節が続いた。

それでも^{あめ}梅雨の切れ間に、



艶やかな^{あじさい おいろ}紫陽花の化粧直しが初夏の訪れを告げている。

このまま自宅での療養を続け、最期まで看取って遣りたいと

^{ねが}希っていた。^{とうじ}往時、病院の療養環境は、加療目的の入院でさ

え辛い^{もの}環境で、況してや人生を閉じる患者にとって、有終の

^{とき}時間を刻む場所とは到底成り得なかった。特に、^{プライバシー}私的空間の

ない多床室では、自由が欠落し、多くの気兼ねを強いられる

余りにも憐憫な^{ところ}処でしかなかった。

この我儘な^{ねが}希いを、N医師が叶えて下さった。N医師は、
父親の胃癌を最初に疑われ、大学病院を紹介して戴いたN病

院の院長だった。救急医療に携わる外科医であるにも^{かかわ}拘ら

ず、往診の依頼にも快く応需して下さった。旧観の医療には、

家庭医としての優しさが、すぐ手の届く^{ところ}処にあった。

それでも憂色漂う末期は、夜間の往診や手厚い看護も無力
に等しく、癌細胞の猛々しさに刃向かう術は無かった。

父親は、心繕いの必要な終末へと移行しようとしていた。

他愛のない日常の会話や団欒が、1枚また1枚と剥落し、
重苦しい空気が立ち込め、家内には、今にも破裂しそうな臨

場感が宿り始めていた。針山に手を置くような日々になら、

それでも、この不慮に負けまいと家族が結束しながら懸命に
闘っていた。

著者 那須 良昭

発行所 医療法人財団 博愛会

〒810-0034

福岡市中央区笹丘 1-28-25

tel:092-741-2626 fax:092-741-2627

本書に記載されております文書につきましては、転載・無断使用を禁じます

